

## －第 1 章－

# 授業に必要な技術

“たくさんの発言が生まれ、思考が深められる発問”

“教える内容が整然とまとめられた板書”

“子どもが真剣な表情で考えたり、話し合ったりする授業”

授業が上手な先生は、長い経験で培った学習時の「技」を持っています。それは、主に経験から生まれています。失敗したことや、先輩の先生がされた授業に感動したこと積み上げた結果です。

こうした先生に共通していることは、子ども達が「先生の授業はわかりやすく楽しい」と言ってくれる授業をしたいという強い願いを持っていることです。

ここで紹介する技は、先輩の先生方が培ってきた技を集め、指導過程の基本に沿って授業づくりと教科特有の授業技術に分類整理したものです。

本著をもとに、なぜこのような技が必要なのか？ どうしてうまくいくのか(いかなかったのか)？ と、実際の授業に活用してください。

# 第1節 教材研究

学習内容の校種や学年の配当、配列、授業時数は変化します。私たちは変化する学習内容に応じて、選択して授業する必要があります。こうした授業の設計を教材研究と呼んでいます。授業設計は主に次の5つです。

- なぜこの学年、時期にこの学習内容を実施するのかという理由を明らかにする。
- この学習内容を指導するにあたって適切な教材をつくる（選ぶ）。
- 学習内容をとらえさせるために有効な子どもの活動を考える。
- この学習活動を実施する上で準備すべき場や学習具（教具）をつくる。
- 子どもの学習意欲を高める発問や手立てなど、教師の働きかけを考える。

## 1 教材研究の3ステップ

### (1) 指導要領解説の内容を具体化する

子どもが学習内容をとらえたと判断するためには、授業後に何が、どのように高まったかを具体化することが大切です。そのためには、考えが変容したり、技能が定着したりしたことを判断する物差し（評価規準）をつくる必要があります。小学校国語の代表的な教材文である「ごんぎつね」を扱った授業を例に、指導要領解説の内容を具体化します。

学習内容（ウ 文学的文章を読む〈小 国語解説 P64〉）

- 読む内容：登場人物の性格や気持ちの変化、情景など
  - （具体化した内容）さびしがり屋のごんが、兵十に親近感を覚え、近づきたいという思いを強めていく様子を読み取る。
- 読み方：各場面の場所、時間、人物の位置や動作を関係付けて読む
  - （具体化した内容）場面ごとのごんの行動や兵十との位置関係を読み、ごんの気持ちの変容を読み取る。

この話には「ごんはさびしがりやで友達がほしいと思いました。」という文章はありません。だから、ごんの行動や兵十との距離を表した叙述から気持ちを想像することが学習内容になるのです。たとえば、4・5場面では以下のように叙述からごんの気持ちを読み取らせませす。

※ごんぎつねの本文については「青空文庫」からDLできます。[http://www.aozora.gr.jp/cards/000121/files/628\\_14895.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/000121/files/628_14895.html)

1 着目させたい叙述	2 想像した情景	3 想像したごんの気持ち
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>月のいいばん</u>でした。ごんは、ぶらぶら遊びに出かけました。</li> <li>・ ごんは、道のかた側にかくれて<u>じっと</u>していました。話し声は、だんだん近くなりました。</li> <li>・ ごんは、二人の話を聞こうと思って、ついていきました。兵十の<u>かげぼうしをふみふみ</u>行きました。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 村人にいたずらばかりするごんは、捕まるとひどい目に遭うので、見つからないように息を殺して隠れていることがわかる。</li> <li>↑ <b>それなのになぜ？</b> →</li> <li>・ 月夜で明るい上に、振り返られると捕まる距離にごんがいることがわかる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 栗や松茸が家にあることについて兵十がどう思っているかが気になって仕方がない。</li> <li>・ たとえ見つかってもいいから兵十の気持ちを知りたい。</li> <li>・ 兵十にだけは自分もひとりぼっちでさびしいことに気付いてもらいたい。</li> </ul>

実際の授業の流れ



授業を考える流れ

実際の授業では、**1**場面の様子がわかる言葉に着目させ、**2**そのときの情景を想像し、「見つかったら殺されるかもしれないのに、どうしてごんはぴつたりと兵十の後ろにいたのかな？」という発問で**3**子どもは想像したごんの気持ちを発表するという流れになります。

ですが、この授業を考える順番は子どもが最後に発言する**3**をまず先に考えてから**2**→**1**の順番になります。つまり、授業はゴールから考えることが大切なのです。

## (2) 本時主眼(ねらい)をくわしく書く

**3**にあたる部分が指導案に書く「本時主眼」になります。本時主眼は、授業内容が変化するので、毎時間変化します。また、他の教科でも用いられるような文章では本時内容ではありません。ここではとらえさせたい学習内容と、内容をとらえるための学習活動を例として紹介します。

### 【本時主眼】

- ① 「自分の気持ちを兵十に気付いてもらいたい」とごんの気持ちを想像することができる。
- ② ごんが兵十に捕まるかもしれない距離まで近付いた理由を話し合う。

①は「授業の最後に発言させたい言葉」です。板書の「まとめ」にあたります。この言葉が出てくるための活動が②になります。つまり、危険であるにもかかわらず、ごんが兵十に近づいた理由を話し合うことで「気付いてもらいたい」というごんの気持ちを想像させることができれば本時の主眼は達成できたことになります。

## (3) 本時主眼達成までの道筋をはっきりさせる

感動する物語にはクライマックスとなるヤマ場があるように、授業にも一番じっくり考えさせたいヤマ場をつくるのが大切です。そのために一番考えさせたいことを聞く中心発問を考え、そこに向かうための発問と、最後に行う発問の順番で考えます。そうすることで、徐々にクライマックスへと向かい、余韻をもって終わる起承転結がはっきりした授業になります。

段階	発問の目的	発問例	発問を考える順番
導入	①重要な叙述に着目させる	・どんな場所でだれがいますか ・何をしていますか	3
展開 前半	②叙述から情景を想像させる	・なぜごんはかくれてじっとしているのかな ・月が出ているかどうかで明るさはどのくらいちがうのだろう。 ・かげぼうしを踏む距離ってどのくらいだと思いますか	2
後半	(ヤマ場) ③想像した情景からごんの気持ちを想像させる	(中心発問) ・なぜごんは、見つかると殺されるかもしれない距離まで兵十に近付いたのだろう	1
終末	④次時への方向付けを図る	・がっかりしたにもかかわらず、どうして次の日もごんは栗を持っていったのかな	4

終末は、次の時間の導入にかかわる発問を行います。「気付いてもらえるまで届けよう」というごんの気持ちを想像できた子どもは、そのために撃たれてしまうという悲劇に大きく心を動かされるのです。

## 2 学習意欲を高める資料や教具を準備しましょう

資料とは、考えをつくったり、深めたりするためのグラフや写真などの情報源です。教具とは、子どもが操作して考えたり、作品を制作したりするとき使用するための道具です。

これらは知識や技能を身に付けさせるための手立てですので、どの場面で、何を目的として使用するのかを明確にして使うことが大切です。

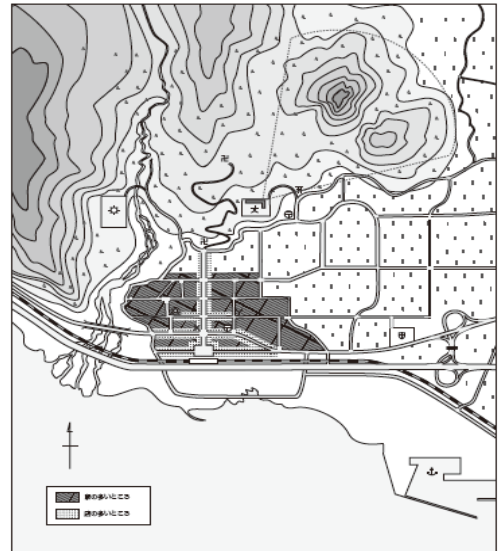
### (1) 資料提示のポイント

#### ア じっくり読み取らせる

社会科などで使われるグラフや統計、地図などは「見る」のではなく「読み取る」ための資料です。グラフであれば事象の変化からその理由を予想させたり、地図であれば土地の高低や交通の様子など、様々な情報をとらえさせたりすることが目的なので、じっくり読み取らせることが大切です。

この地図からは、以下のことから人々のくらしの様子を考えさせます。

- 土地の高低・斜面の緩急
- 土地利用の様子
- 建物・施設・交通の様子



#### イ 見せている間は発問しない、発言させない

個別活動を始めたら、静かに資料を読み取らせませす。そのためには次のことが大切です

- ・疑問が生まれぬ説明をしたり、説明の後に質問の場を設定したりする。
- ・途中で質問したくなったり、分からなくなったりしたら挙手させ、個別に対応する。

#### ウ 精選して見せる

一つの資料からつくった考えをどのように深めたいかを具体化して、次の資料を提示するタイミングや新しい見方への着眼点を考えることが大切です。

#### 【複数の資料を組み合わせる順番に提示し、考えをつくり出していく授業の例】

【資料1】 つねに安い魚を求める消費者

「当然だ」という反応を期待する。

【資料2】 枯渇する水産資源

安く売ってもうけるためには、たくさん獲るしかないことに気付かせる。

【資料3】 年々減り続ける日本の漁師

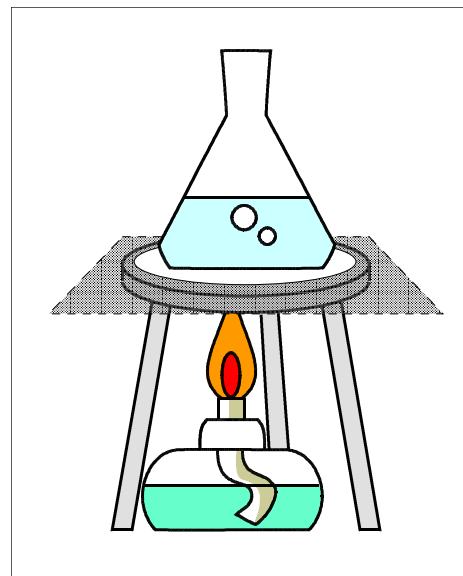
獲っても安くしか売れない上に、そもそも魚が獲れないから漁師をやめるしかないことに気付かせる。

今後の授業のあり方について考えるめあてへと導く。

## (2) 教具を使用させるポイント

### ア 操作の仕方と手順を理解しておく

例えば理科学習で使用するフラスコなどの実験器具は、実験の目的や使用する状況によって設置の仕方や加熱のタイミングなどを事前に確認しなければなりません。正しい順序で正しく操作しなければ主眼達成に必要な結果が得られないからです。そのために、必ず予備実験を行うことが大切です。



### イ 操作の仕方に慣れておく

安全上、気を付けなければいけない教具（彫刻刀・薬品・包丁など）はその操作に先生が使い慣れて、子どもに正しく、安全に操作させるためのポイントを、先生が落ち着いて操作しながら示します。

### ウ 操作ができるまで繰り返して指導する

例えば音楽ではリコーダーの基礎的な技能がなければ、表現を工夫して演奏できず、学習内容もとらえることができません。一定の技能が必要な教具（楽器、筆、裁縫道具など）は繰り返し指導し、徹底して身に付けさせることも大切です。

### エ 指示を明確にする

何のために使うのか（使用目的）、どうやって使うのか（使用方法）、何ができればよいのか（活動のゴール）、どれくらい使うのか（使用時間）を子ども達に明らかにしてから使わせましょう。

下の例は、小学校理科で、温度計を使って水の温度変化を測る時の指示です。実際にすることを見せながら説明することが大切です。

 A cartoon illustration of a male teacher with glasses, wearing a white lab coat and a red tie. He is pointing upwards with his right hand. Four blue speech bubbles are arranged around him, each containing text.
 

- Top-left bubble: 水の温度変化を測るために温度計を使います。(目的)
- Top-right bubble: 温度計の液だまりをビーカーの中へ入れて温度を測ります。(方法)
- Bottom-left bubble: 水が沸騰するまで、1分ごとに水温を測って記録します。(ゴール)
- Bottom-right bubble: 10分経ったら沸騰していなくてもやめます。(時間)

## 第2節 1時間の展開を考える

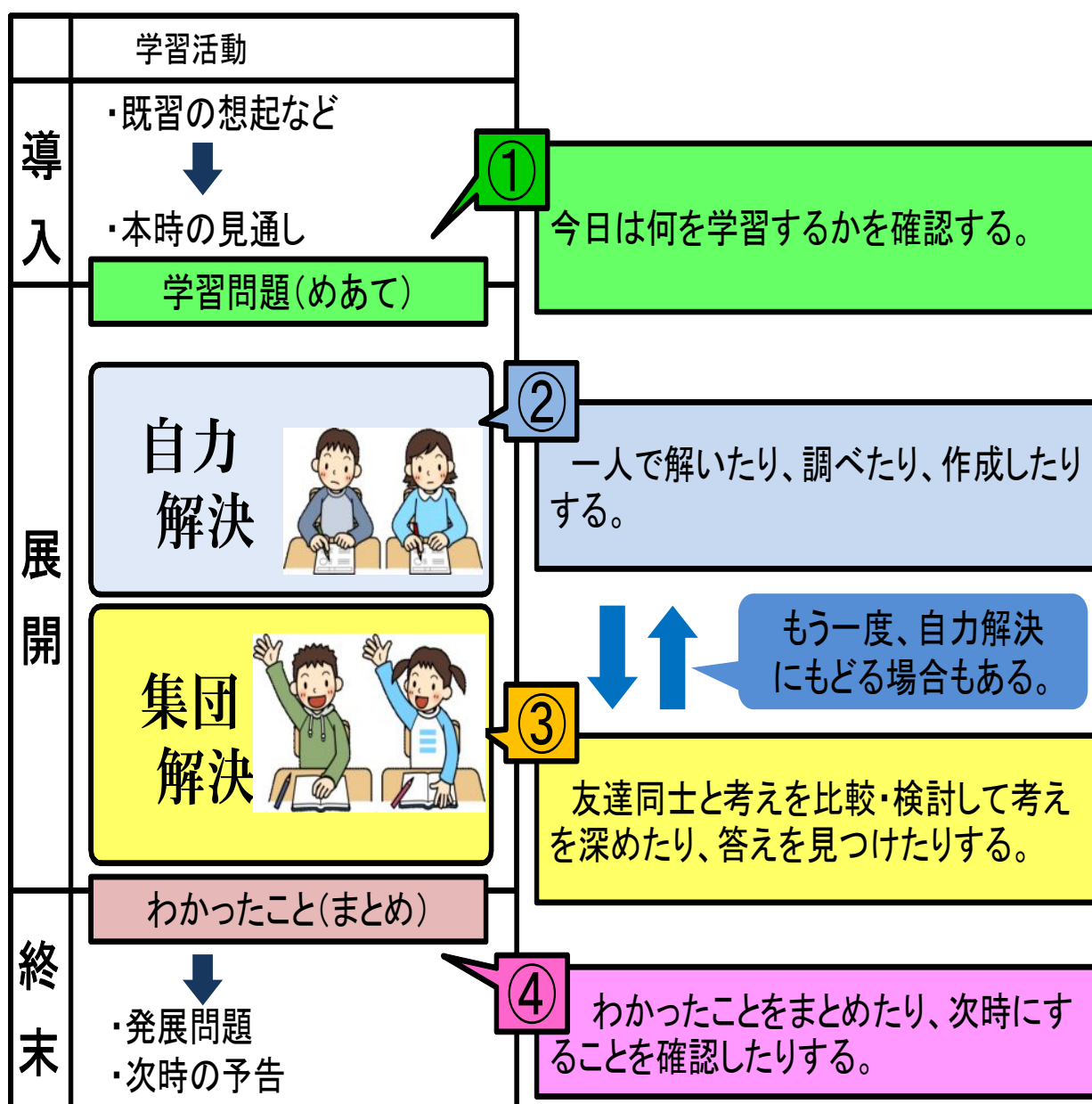


展開は、ゴール（終末段階）をはっきりさせてからからスタート（導入段階）に向かって考えます。

### 1 1単位時間のしくみ ～導入・展開・終末をはっきりさせよう～

「授業はドラマだ。」と言われます。物語のように「起承転結」がある授業は子ども達も引きつけられ、時には大きな感動を伴います。そのためには授業の流れをつくる必要があります。

基本的に問題解決的な学習は、導入・展開・終末の3段階でつくられます※。さらに、展開段階を前半と後半に分け、「自力解決」と「集団解決」を行い、学級全員が納得して理解したことをまとめます。



※子どもが学習意欲を高め、学力を身に付けることをねらいとした授業展開の例として紹介しています。

## 2 「めあて」と「まとめ」がぶれないように

今日の授業で何をやる(考える)のかを表したものが「めあて」です。反対に、今日の授業で何がわかったのか(できた)のかを表したものが「まとめ」です。めあてとまとめがぶれると、子どもの問題意識がずれてしまいます。「まとめ」とは、本時の主眼を子どもの言葉になおした授業のゴールなので、**ゴールから先に考えて授業をつくります。**

### 授業のゴール(本時主眼)

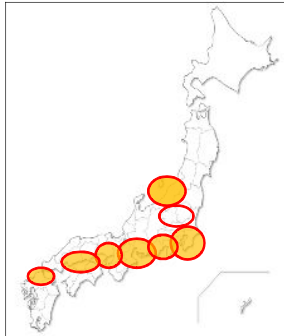
**主な工業地帯が海沿いにあるのは、船によって大量の原料や製品を効率よく運べる港があるということを資料からとらえることができる。**

↓これを授業の最後に発言する子どもの言葉にしたものが「まとめ」になる。

**まとめ 大きな工業地帯が海の近くにあるのは、船で原料や製品を大量に運ぶ必要があるから(ということが地図や写真からわかる)**

↓このまとめが子どもから出るようにするためには・・・

日本の工業地帯の分布図と、主な工業地帯で製品を積み込む様子がわかる写真を提示してとらえさせる活動を仕組む



大型の船が入れる港があり、製品を置く広い場所が工場の近くにあると便利だということがわかった。



↓この資料を使って考えさせる目的をもたせるためには・・・

**めあて なぜ、大きな工業地帯は必ず海の近くにあるのか、地図や写真を見てわかることから考えよう。**

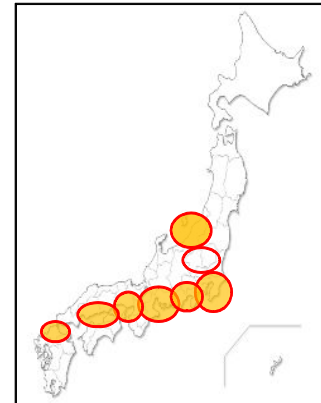
↓この問題意識が生まれるためには・・・

日本の様々な工業地帯の生産額を表した表を提示して、上位の工業地帯がある場所を地図上に赤鉛筆で記入させ、海沿いであることをとらえさせる。

順位	場所	生産額
1	京浜	55兆円
2	中京	48兆円
3	阪神	30兆円
4	北関東	25兆円
5	瀬戸内	24兆円
6	東海	16兆円
7	北陸	13兆円
8	北九州	7兆円



場所を記入する。



### 3 導入・展開・終末段階に応じてすること

#### (1) 導入 ーめあてから板書までー

めあては、「どのような内容を」「どのような方法で」学習するのかを記述します。

**めあて なぜ、大きな工業地帯は必ず海の近くにあるのか、地図や写真を見て考えよう。**

学習意欲を高めるために、子どもが考え出したように仕組むことが大切です。そのために、以下のような導入でめあてをつくります。

<例1>

- ① 前時までに学習したことを思い出す。
- ② 前時までの学習では解けない新しい学習問題に出会う。
- ③ どうすれば答えを見つけられるか話し合う。

<例2>

- ① 身近な出来事など自分達が知っていることと大きく違う事実を紹介して驚かせる。
- ② 「なぜ?」「どうすればいい?」と問い返す。

<例3>

- ① やってみたいことやつくってみたいものを提示する。
- ② 手順やポイントを説明して「できそうだ」という見通しをもたせる。

#### (2) 展開 ー前半で自力解決し、後半で集団解決しますー

##### ① 展開前半（自力解決）

写真やグラフからわかることを調べたり、問題文から式をつくったりする活動は、個人で行います。この間、教師は机間指導で、子どもの様子をしっかりと観察し、困っている子には個別に支援します。

##### ② 展開後半（集団解決）

前半の自力解決で考えたことをみんなが出し合います。基本的には、代表数人に発表させ、いくつかの考えがあることを確認し、分類・整理して考えを焦点化させます。主な発問は次の4つです。

- 【選択】どちらが（どれが）一番いいかな？
- 【順序】どちら（どれ）から先にやった方がいいかな？
- 【根拠】なぜするのか？／しないのかな
- 【仮定】もし、これがなかったら（あったら）どうなるかな？

#### (3) 終末 ーわかったことをまとめたり、次の時間へつないだりします

主眼で示した子どもの姿を表させる最も重要な発問です。具体例を示します。

- ・今日のめあては「〇〇〇〇について考えよう」でしたね。どんな考えをつくることができましたか。
- ・みんなの考えをまとめると、どのようになりますか。
- ・（新しい問題を提示して）今日わかったことを使って解けそうですか。
- ・（まとめに矛盾する状況を提示して）おかしいですね。どうしてでしょう。



## 第3節 発問と助言

発問・助言は、授業中に教師が音声言語を用いて思考や理解を求める子どもへの働きかけです。発問は問いかけにより思考をうながします。助言は示唆、指示、説明などにより理解を求めます。どちらも主眼達成のために必要不可欠な教師のツールです。

### 1 発問

授業は、発問で進行します。発問が悪ければ子どもの思考が停止したり、教師が意図しない方向に授業が進んだりして主眼達成もできなくなります。子どもに何を言わせたいのかをはっきりさせてから発問を考えましょう。

#### (1) 発問の目的と方法について

##### ① 何のために発問するのか

発問は既習内容を問うもの（想起発問）と、考えをつくったり深めたりするために問うもの（思考発問）に分けられます。

（想起発問の例）学習したことが身に付いているかを確認するため

「鎌倉幕府は誰が作りましたか？」

→「源頼朝です。」

（思考発問の例）理由や根拠を求めて考えを深めるため

「なぜ頼朝は、鎌倉を政治の中心にしたのでしょうか？」

→「貴族の権力が及ばない場所で武士中心の世の中をつくろうとしたからです。」

→「源氏ゆかりの土地だったので平氏に対抗する意味で中心にしたからです。」

→「周囲を山と海に囲まれ、守るのに都合がよい場所だったからです。」

##### ② いつ、どのように発問するのか

想起発問は求める答えが決まっていることが多いので、授業の導入場面で既習を再生するときに使います。

思考発問は、子どもが考えて問いに答えます。そのため一問多答となる発問になります。子ども達が自分の結論と根拠を述べる展開後半、集団解決場面で用いられます。

#### (2) 発問計画を立てよう — 発問は、流れの中でつくられる —

1時間の授業「導入、展開、終末」の流れで子どもは学習意欲を高め、学習内容を理解していきます。こうした展開の道筋をつくる発問をつくる手順は、まず主発問を活動ごとに一つ考え、次にその間を補助発問でつなぎます。次のページに、具体的な算数の授業を例に、一つの発問の役割と順番について紹介しています。

小学校 第5学年 算数科

平行四辺形の面積の求め方の発見をねらいとした授業の発問例

# 1 導入段階

1と2が前時に学習したことを思い出させる想起発問

「指示」とよばれる助言の一つ (4ページ参照)

理由について考えさせる思考発問

解決方法について考えさせる思考発問 (めあてを引き出して展開段階にうつる大切な発問)

発問	子どもの反応
1 前の時間は三角形の面積の求め方をどうやって求めましたか	三角形を長方形に直して面積を出してから2で割りました。
2 今日は、平行四辺形の面積を求めてみましょう。(図形を提示)	底辺×高さ÷2の公式を使って求めました。
3 今まで学習した面積の求め方は使えますか	使えません。横の長さは測れるけど、たての長さがわからないからです。 三角形のように高さを決める頂点がどれかわからないからです。
4 <主発問> どうすれば求められそうですか	<u>三角形の時と同じように、前に学習した図形に直したら求められそうです。</u>
5 今日は、どんなめあてがいいですか	「面積を求められる図形に直して、平行四辺形の面積を求めよう。」です。



# 2 展開段階

「指示」

発問	子どもの反応
めあて：面積を求められる図形に変形して、平行四辺形の面積を求めよう。	
1 では、自分の考えをノートにかいてみましょう。時間は、10分間です。	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>(太郎君の考え)</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>(花子さんの考え)</p> </div> </div>
2 それでは、自分の考えを発表しましょう。	

子どもが発言した後は、「なるほどね」「よく考えたね」など一言でいいからほめましょう。(はげましという「助言」の1つ)

本時のねらいを達成させるための発問(ゆっくり・はつきり発問します。)

これは「説明」です。具体的に、簡潔に伝えられるように心がけます。

もう一度、今日のめあてを確認し、子どもがまとめを言えるように、促します。

黄色い線の左側は直角三角形になります。それを反対側にくっつけると平行四辺形が長方形になりました。だから、たて×横で求められると思います。



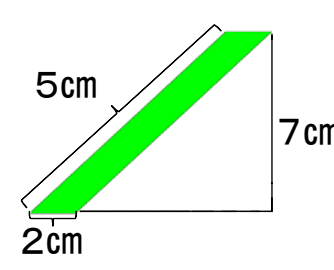
対角線で平行四辺形を二つに分けると大きさが等しい三角形になります。だから、その面積を計算して2倍すれば求められます。



<p>3 &lt;主発問&gt; 平行四辺形も式を立てて求められるでしょうか。</p>	<p>&lt;太郎君の考え&gt; 黄色い線は、長方形のたてと同じだから(たて)×(横)になります。 &lt;花子さんの考え&gt; 三角形が二つだから(底辺)×(高さ)÷2×2で(底辺)×(高さ)になります。</p>
<p>4 平行四辺形は「たて」の辺がないので、三角形と同じように「高さ」と表します。だから「横」になる辺は「底辺」と表します。</p>	
<p>5 ということはどのような公式になりますか</p>	<p>底辺×高さになると思います。</p>
<p>6 今日のめあては「面積を求められる図形に直して、平行四辺形の面積を求めよう。」でした。まとめはどのように書いたらいいですか</p>	<p>「平行四辺形は、長方形や三角形に変形すれば面積を求めることができる」です。</p>
<p>まとめ： 平行四辺形は、長方形や三角形に変形すれば面積を求められる。公式は「底辺×高さ」となる。</p>	

3 終末段階

次の時間にすることを予告することで、次時への見通しがもてます。

発問	子どもの反応
<p>2 次の時間はこの平行四辺形の面積を求めます。求められそうですか？</p> 	<p>あれ、高さはどこだろう。 底辺は2cmと思うけど、高さは5cmと7cmのどちらだろう。</p>

## 2 助言

助言とは、子どもの学習理解を助ける子どもへの働きかけです。大きく「指示」と「はげまし」に分かれます。指示は、学習の方向付けを明らかにして子どもに見通しをもたせるために行います。はげましは、自信をもたせたり、成感を味わわせたりして次の目標をもたせるために行います。発問と異なり、子どもの反応を求めることは少なくなります。

### (1) 指示

子ども自身が今から何をすべきかを明確にできることが大切です。また、どこまでできればよいのか、できないときはどうすればよいのかと詳細に示します。

#### ①大切なことをわかりやすく言う。

##### ・一指示一行動

家庭科の裁縫など、長い時間の活動はスモールステップで行います。一つの指示を出した後は、その作業が完了するまで次の指示は出しません。また、指示を出した後は机を回って個別に声かけを行い、全体の進捗状況を把握します。状況によっては一度作業を止め、再度修正した指示を出すことも必要です。



##### ・一指示多行動

理科の実験や家庭科の調理実習などのグループで取り組む作業は、子どもが全体の工程や手順を見通すと効率的に活動できます。工程表などを提示して各段階の作業内容やかかる時間などを説明した後に行動させます。



#### ②説明と指示は明確に区別する。

することだけを指示するだけではうまく伝わらないこともあります。何のためにそれをするのかや、使う道具・結果の様子などの説明が必要な場合は、指示と説明を明確に区切ります。



#### ③学ぶ順番をはっきりさせる。

##### ・易しいものから難しいものへ（例：リコーダーの練習）

指が1本で出るシの音から練習し、2本、3本と増やしてラ・ソを出す練習をします。次に右手の指も使って音を増やしていきます。

##### ・段階を明らかにして（例：みそしるの作り方）

まず鍋に煮干しを入れて沸騰させ、だしをつくります。

次に煮えにくい順番で具材を鍋に入れます。

最後にだし汁でといたみそを鍋に入れます。



(2) はげまし

子どもの学習意欲を高めるためには、子どもへ何ができればよいのか明確なゴール像を示すことが大切です。その際、子どもが自信をもって考えたり、活動したりできるよう以下のようなはげましを心がけましょう。

ア 支援：学習に自信がない子どもに対しては机間指導のときにかかわる。

間違っていたり、分からなかったりする子どもは、その実態に応じてヒントを出したり教えたりします。また、個人で作業する時などに「間違っていないから自信をもってね。」というメッセージを伝えることが大切です。このとき、しゃがんで子どもと目線を合わせ、うなずきながら聞いたり、後ろに寄り添って声をかけたりすることを心がけます。

イ 容認：間違えは悪いことではないことを伝える。

正しい答えを見つけること以上に、その考えをつくる過程が大切です。

たとえば、間違えた子どもが間違えた理由を他の子どもに説明させ、その子だけが思いついたアイデアなどはおおいに誉めたりして、結論を見つけるまでの過程が大切であることを伝えます。

ウ 賞賛：何がどうしてよかったのかを具体的にほめよう。

ただ「よくできました。」と誉められても理由がはっきりしないとうれしくありません。賞賛は評価であり、次のステップに向けた方向付けです。具体的な根拠を上げて伸び具合を示し、よくなった場合は指摘して改善させることが大切です。その後で、次の課題を出すことも、学習意欲の向上につながります。

# 第4節 板書

板書の役割は、子どもの活動の見通しや考えの道筋を示すことです。考えの足跡を見ながら学習を振り返ることで分かり直しが図れます。

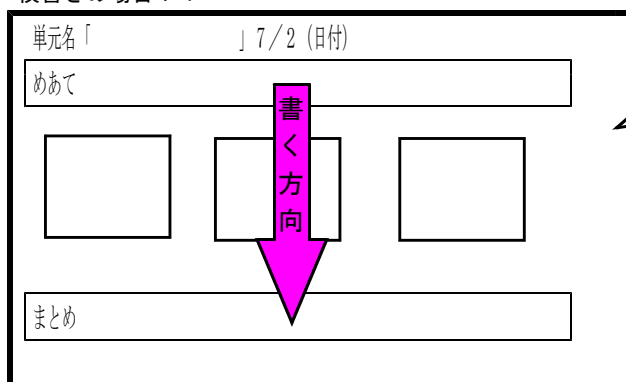
具体的には、以下のような役割があります。

- 学習の流れをつくる：どんな学習をするのかを確認したり、どう考えたらよいのかを方向付けたりすることで学習意欲を高めることができます。
- 考える場を与える：子どもの発言を掲示して、比較したり分類したりすることで考えを再構成することができます。

## 1 板書の作成手順

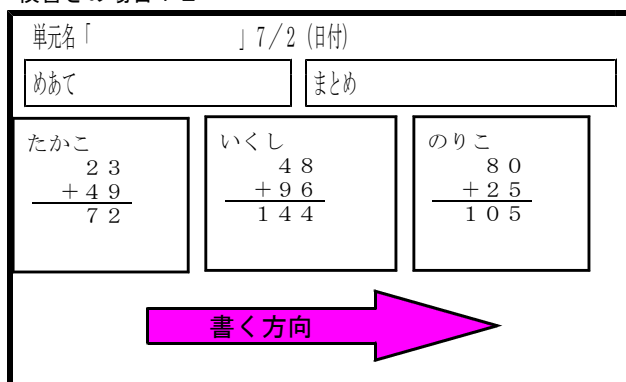
### (1) 基本的な形式

横書きの場合：1



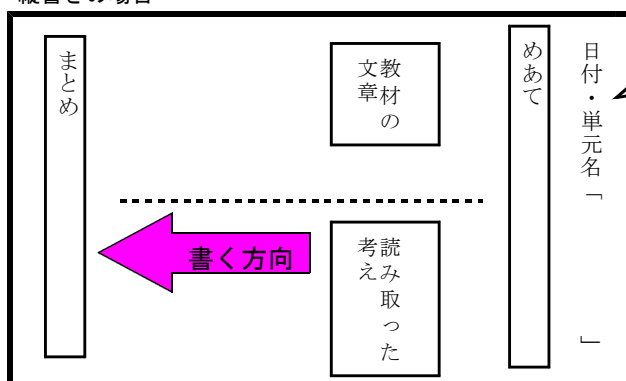
- ・わかったことや考えたことを整理して書きます。
- ・写真やイラストは文字数を少なくして見える大きさにします。

横書きの場合：2



- ・子どもが書く場合は、スペースを広くとります。
- ・「まとめ」は右下に書くこともあります。

縦書きの場合



- ・上下や左右に分割して対応させると授業の流れが見やすくなります。(左図は上下分割の例)

**(2) 発達段階に応じた文字の大きさにします**

ア 文字の大きさを考慮します。

字の大きさは、一般的には低学年で10cm 中学年6cm 高学年4cmとし、漢字を平仮名に比べてやや大きく書きます。

イ ていねいに書く

子どもは先生が書く黒板の文字をお手本にします。書き順に気をつけ、しっかりした筆圧で文字列が整うように書きます。

**2 指導効果を高める板書のポイント**

**(1) 文ではなく、言葉を書く**

子どもの発言をそのまま書いてしまうと、時間がかかります。その間子どもは思考を停止させますので、必要な言葉（キーワード）で簡潔に、書きます。

そのまま書いた例

必要な言葉で書いた例

くろうそくの火が消えた理由>  
 ・びんの中でろうそくが燃え続けて中にある空気がなくなったから  
 ・びんの中にある物を燃やすものがだんだんなくなって消えた

くろうそくの火が消えた理由>  
 ・びんの空気  
 ・もえるもの  
 どうやったら確かめられるかな？

矢印を上手に活用！

**(2) 「掲示物」を使って学習の流れを整理する**

すでに学習したことや、作業手順などを掲示物としてまとめておくと指示や説明内容の理解が深まります。

前時の学習を掲示して振り返る。

**織田信長のしたこと**

新戦法  
商業政策  
武士の専門化  
↓  
今までにない戦略で勢力を拡大した





めあて 秀吉はどのように天下を統一したのか、信長のしたことと比べながら調べよう。



**(3) 子どもが発言するときは書かない**

子どもが説明しているときは板書しません。きちんと目を見てうなづきながら聞き、発言が詰まったときは助言できるよう心がけます。発言が続くようなときは、①その内容をメモしながら聞いて4～5人を発表させたら一度切り、②要旨のみを板書します。

①メモ → ②板書

### 3 授業の目的に応じてレイアウトを工夫する

#### (1) 分類整理しながら板書→解決への見通しをもたせる

たくさんの考えを出し合い、それらを整理して考える方向性を見つける板書です。単元の導入段階などに効果があります。

##### STEP1 たくさんの考えや言葉を出す

##### お米がよくとれる庄内平野ってどんなところ？



- ・広い平野
- ・所々に集落
- ・たくさんの水路
- ・5月なのに雪
- ・水田はほとんど長方形
- ・高い山
- ・大きな川

- ・どんどん発表させて、その順番に板書していきます。
- ・見てわかることのみを発表させ、発表への抵抗感をなくします。

##### STEP2 仲間分けをする

##### お米がよくとれる庄内平野ってどんなところ？



- ・広い平野
  - ・大きな川
  - ・高い山
  - ・5月なのに雪
  - ・たくさんの水路
  - ・所々に雪
  - ・水田はほとんど長方形
- 地形のこと
- 気候のこと
- 人がしていること

『「広い平野」は地形に関係することだね。他に地形のことはないかな?』と発問することで仲間分けに意識を向けます。

##### STEP3 これから調べたい視点としてまとめ、めあてをつくる。

##### お米がよくとれる庄内平野ってどんなところ？



めあて:なぜ、庄内平野は米がよくとれるのか、3つのことから調べよう。

- 地形のこと
- 気候のこと
- 人のこと

庄内平野が米所である理由について、仲間分けからつくった3つの視点から調べるよう指示をします。

#### (2) 体系的板書→知識・技能を確実に習得させる

情報を整理して意味づけしたり、キーワードをつけたりして、知識を習得させます。

めあて 太陽系の惑星の特徴について整理しよう。

水星 金星 地球 火星

地球型惑星

- ・小型
- ・表面が固体(岩石)
- ・密度が大きい
- ・自転が長い
- ・環がない

アステロイドベルト(小惑星帯)

木星 土星 天王星 海王星

木星型惑星

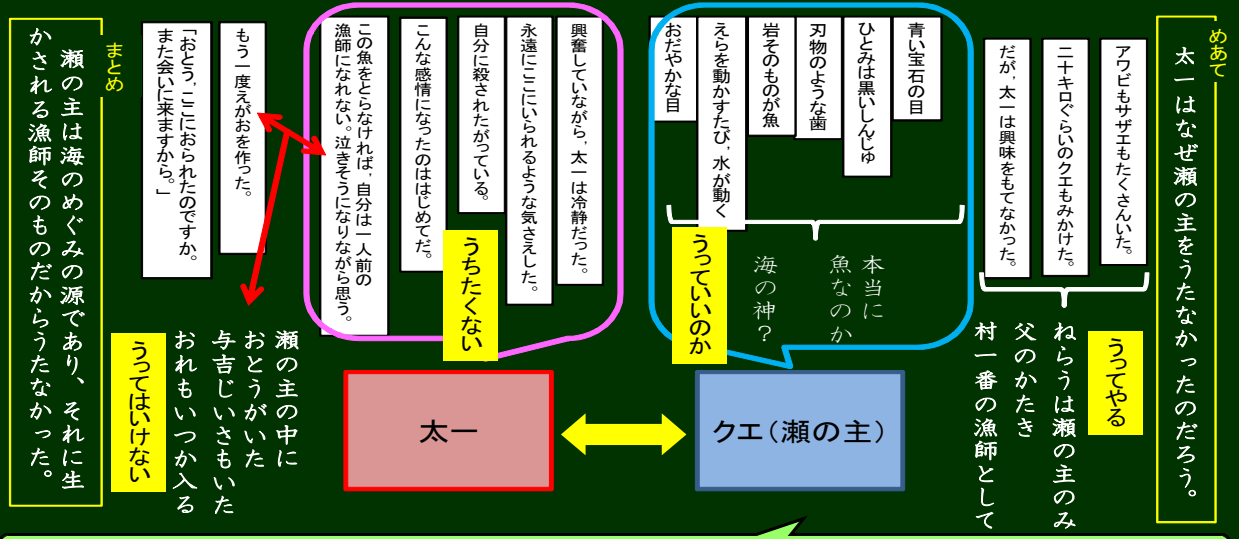
- ・大型
- ・表面が液体(ガス)
- ・密度が小さい
- ・自転が短い
- ・環がある

まとめ アステロイド・ベルトをはさんで太陽系の惑星は特徴が大きく異なる。



**(3) 構造的板書→思考力・判断力・表現力を育てる**

黒板全体を一つの図として構成したものです。書かれた一つ一つの要素が次第につながり合い、全体の意味がわかるようにしていきます。比べたり、関係づけたりして考える授業には特に効果があります。



主人公の漁師である太一が、村一番の漁師だった父のかたきであるクエと出会い、葛藤した末にうたなかつた場面における心情の変化を表しています。(小・国語6年「海の命」立松和平 作)

**4 チョークの使い方**

**(1) 色づかいをマスターしよう**

文字は白で書き、ます。黄や赤は白に比べて目立つため、枠囲みやアンダーラインなどで使うよう心がけます。

青や緑は黒板の色と似ているため、教室の後ろからなどはよく見えないことがあります。使う時は、濃くはっきりとした線をひきましょう。

**(2) 持ち方をマスターしよう**

**ア 親指・人差し指・中指の3本で持つ**

チョークを包み込むように持ちます。黒板に対して寝かすすぎず、先を回しながら削れる部分が一定になるように書きます。長さが半分以下になったら替え、短いものは枠囲み用として貯めておきます。



**イ しっかりと、正しく確実に書く**

力を入れて、ていねいに書かなければ薄くなってしまいます。後ろに座っている子どもが見えるくらいの濃さで書きます。書き順に気を付け、くせ字は直します。(書き方もお手本です)

## コラム:先生の「立ち位置」

授業中は、全員の子どもを視界に入れ、表情の変化やつぶやきなどに気を付けます。学習についてきているか、体調が悪い子はいないかを確認するためです。特に、小学校低学年の子どもは急に体調不良や、トイレへ行きたくなくなったりします。

基本的には、発問や説明などの話をする前に一呼吸入れて、全体をぐるりと見回します。全員がこちらを向いているか、集中しているかがわかります。その上で授業を進めます。

### <基本的な3つの立ち位置>

#### ○全員に話すとき

教室の中央に立ち、全員に視線を合わせながらゆっくり、はっきりと話します。身振りや手振りを使って、表情豊かに話します。子ども達の反応を確かめながら話すことが大切です。特に、つぶやきは聞き逃さないようにします。よい反応があったらたくさん誉めます。



#### ○板書するとき

黒板に対して4、子どもに対して6の割合で体を開きます。子どもに背を向けて板書するなど、黒板に話しかけないようにします。また、黒板の下部に書くときは、自分の手で手元が見えなくなるので、しゃがん腕を伸ばしてで書きます。

#### ○子どもが発表しているとき



× 手元が見えない



○ 手元が見える



黒板の端に立ち、発表者へも視線を送ります。

この時、先生は「なるほどね」「どうしてそう思ったの?」と声をかけ、「みなさんはどう思いましたか?」と助言をして他の子どもの発言をうながすと話し合いが活発になります。

